

日本発達心理学会・北海道地区懇話会 2020 年度活動報告書

オンラインシンポジウム「『道具と結果方法論』から見た学校臨床」を下記の通り実施したことをご報告致します。

1. 日時： 2020 年 9 月 12 日（土） 13 時～15 時

2. 会場： Zoom により実施

3. 参加者・スタッフ

話題提供： 松嶋秀明（滋賀県立大学）

川俣智路（北海道教育大学）

司会： 伊藤崇（北海道大学）

グラフィックレコーディング： 岸磨貴子（明治大学）

Zoom オペレーション： 新庄康祉（北海道教育大学大学院生）

参会者：64 名（事前登録者数）

4. 概要

心理学理論は強力な「道具」である。しかしそれが「適用」される時、理論は無謬であるもの、教育実践やその対象は修正されるべきものとされる。すなわち、道具としての理論の想定する「あるべき結果」に実践が引き寄せられる。Newman & Holzman (1993/2014) がヴィゴツキー理論から導いた「道具と結果」方法論は、道具とは適用されるものではなく実践されるものとする。この方法論を援用するなら、理論という道具は学校においてその意義を変える可能性をもつ。

たとえば、理論をもつことにより、その適用対象となる生徒への「見え方」が変化する。つまり、理論を持ち出した当の実践者自身も変化するかもしれない。理論を「使う」意味とは、使用者にとって理解可能なように対象を変化させるところにあるのではなく、むしろ自らも変化する対象を理解できるようになることでもあるかもしれないのだ。

この問題について、『少年の「問題」/「問題」の少年』（新曜社）を執筆した松嶋秀明氏と、Newman & Holzman (1993/2014) の日本語訳（『革命のヴィゴツキー』（新曜社））を上梓した川俣智路氏と伊藤が互いに互いを補完しあうべく鼎談した。

鼎談後は事前あるいは鼎談最中に送られた参加者からの質問に答え、議論を深めた。

話題提供および議論で話された内容はすべて書き起こされた。書き起こし内容の連載が、(株)新曜社ウェブサイト「クラルス」にて進行中である。伊藤崇（文責・北海道大学）

以上